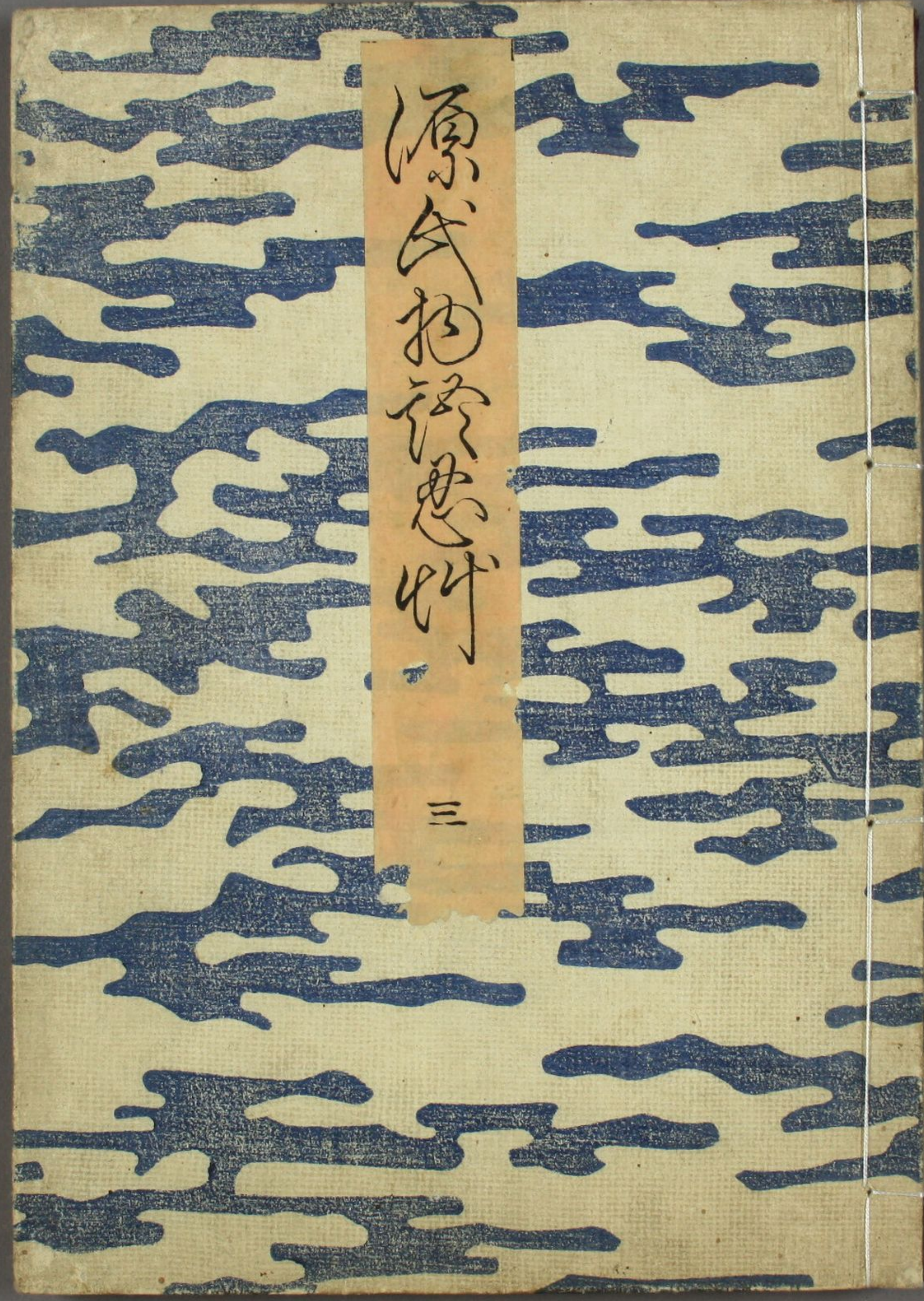




源語忍草卷之三

目錄

岩より海

むろより枝

若菜上

またれ根

岩の〜紫

同下

仙の山お終りし源

花の枝より花をさむる人なりとてあそびつゝとて

はついでふゆのころのほろせふお終りし源

数多のて試せし方なりとてお終りし源

秋霞のの黒方源のの侍候紫の上はと梅花とふ散里の紅葉

薰衣香

何れはゆ方ののくはえり何れと面白くと譽め終りし源

なれ判者なりと嫌ひ多しなり月とてお終りし源

源第はとて多勢御のの御は色柏木頭の中將の和琴とて源

宰相の中將の横笛柏木のゆき舞の少將の柏子とて終りし源

ゆとて源のあどいと面白くもなりとてお終りし源

ゆとて面白くもなりとてお終りし源

ゆとて面白くもなりとてお終りし源

花の香気なりとてお終りし源

ゆとて面白くもなりとてお終りし源

ゆとて面白くもなりとてお終りし源

ゆとて面白くもなりとてお終りし源

ゆとて面白くもなりとてお終りし源

ゆとて面白くもなりとてお終りし源

ゆとて面白くもなりとてお終りし源

ゆとて面白くもなりとてお終りし源

暇におがせふりひきつぐ中務のまといふまゝにいと云々
 せんとおひて海まきようけりふと世の中ふまははるべ
 肉土居の海袖つづきてと何とびつふせんとせりふまき
 加文の肉土居と云々暇と指さし移るとお娘の雲井の席と云
 忘さぐくは姫君あつてふのまに持するてと云々せしむ
 ちのびつと云ふまきつうけり移るふの絶ぐ雲井の席と云々
 ちとせんとおひよりて所詮云々肉土居のむとあのか人
 けりてと云ふおひれり中務のまきと云々と云々
 せんとおひと云々海まきとあどのひてまきりけりふまき
 所々あり

ほどあつたおのふおのをわかれぬ人やくふと云々
 中務のまきひきつうけりつづくあふまきと云々移る
 雲井のつりつうけりつづく移りて云々
 限りとておひと云々わかれぬと云々おひと云々
 と何と云々おひと云々

後ろり葉

姉妹の姫君の入内おひと云々のあつてもおのれ宰相の中將と
 物思ひつづてあつたつづりなり肉土居をつまびの夕暮を何て
 けりてお娘の有方やくあけまきまけてお舞ふと云々と云々

[illegible][illegible]

わくして源乃小神ふ白ひをさるるをせたるじより^{いづれ}いづれか入る
おがくおむもりげたる成程なりと源の初より若くは^{いづれ}いづれ
取引よせて紫のうへ

目み通くつるまが^{いづれ}いづれ世の中を引未達くたるいづれか
吉事しおどめいづれいづれを源市流して

命こそたもともたも^{いづれ}いづれあはれぬ中れち^{いづれ}いづれ
なまのまひて源せういづれいづれいづれいづれいづれいづれ
いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ
穢穢より女房達と物知りなまのまひ^{いづれ}いづれいづれいづれ
か^{いづれ}いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ

いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ
源^{いづれ}いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ
わ^{いづれ}いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ
何といふいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ
目^{いづれ}いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ
姉^{いづれ}いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ
眼^{いづれ}いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ
ま^{いづれ}いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ
男^{いづれ}いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ
源^{いづれ}いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ

[illegible]

卷一百一十五

子

二十六

うぐそとやうの猫ども是ふ方どとの終りなまはれ
 ら身代がどづー終りのゆゑんと養つてあるこよびあるも
 うろく近くみせ置入終日極や^ひ_{ひめすめで}おひきのいとうくあづさて
 さをすすむが小神の福子まつ^{すき}通より姉むは通る成ひと
 町屋へうけくと思ふいとわづめてお姉さまへへん
 終りと鳴けバめと接してほめる海へ木

窓院より人の心もともなふせむる事上何ぞも思ふ事なり
 是をひくはらひるにやと情ふ入ておづめ居るを盤石の
 左大將の心の方のむつゝゝの尚ほさうぞと免の北の方を
 南よりゝの橋柱の君をねむり式部々の心持事とゝゝゝ

以て源の事考案の事跡御の宣成等に在るは母君
 年月に在る。物乃け^{おも}て怪^{おも}し。然るがその事成りてあるが
 市祖母と云ふより。びまの入たる。因の帝。市位より。はる
 終ひて。今年十八年にあつた。せうふの年中。より。わく。世の
 位を去て^{さう}。公安く。おのり。海をむく。のふ。4日は。守く。悩ま。路
 なる。偏より。り。せ。せ。ふ。ひ。ぬ。さ。う。の。市。位。ひ。と。世。の。人。情。と。
 まれと。春。宮。お。と。り。く。お。のり。海。を。お。つ。ぐ。と。世。の。政。治。と。事。
 とう。今。ま。の。概。政。の。か。り。米。玉。の。つ。な。む。は。市。父。の。事。と。が
 よ。の。つ。ひ。を。お。も。て。め。こ。と。と。帝。と。市。位。と。を。去。終。ひ。に
 年。より。ぬ。る。事。乃。め。り。ぬ。り。成。り。け。ん。何。と。せ。め。る。と。と。と。と。

巻より此の葉のどめとの帝のり今も階ふあせあひて
冷泉院とてなれり紫の上の山あやこふらふとてあを
歌て書^ませんとしてその帝の二条院へ移しまゝせしり
とも数なりて柏木の古^き榊の傍に中納言ふぬめを今の
帝^筆の^筆の師なるまぶ親しく思ふも時の人なるも方の
世なるよりぬふ所をも思ふその叶ぬつて残るをひ
院て女三のまはし帝の女三のまをあげつうせしけむ
人まざるふもて解してゆめも入びるふらぬふ小侍を
よびていふくまのまをひひ只おごに思ふよとひきせよ
それなどいふ女三の帝の^まの^まもまうとてたゞ今の
紫の上の帝の^まに付て海と二条院ふねとて海邊にふね
ひまのりともひきす^ませえ^まま^まとて^の邊^のに^まてふ^まぬ^まと
まを^ま何^まとと約束してゆめぬふくとて思ひにまゝに
まを^まなれ^まが^まの^まなり^まの^ま後^まあ^まといふ^まひ^ま人
と^まの^まの^まを^まして^まま^まと^ま人^まず^まて^まま^まに^また^まれ^まと
まの^ま柏^ま木^まの^ま右^まと^まけ^まま^まに^まぬ^まび^まつ^まま^まに^まの^まび^まて^まぬ^ま
小侍^まの^まひ^まて^ま几^ま帳^まの^ま陰^まふ^まま^まなり^ま女^ま三^まの^まま^まと^まい^まふ^ま
ま^まと^まの^まま^まなる^ま源^ま氏^まの^まお^まの^まと^まま^まと^まま^まと^まあ^まぬ^ま人^まあり
ま^まれ^まが^ま海^まま^まと^ま思^まつて^ま人^ま百^ませ^まと^ま誰^まも^まま^まに^ま只^まわ^まあ^まれ^ま海^まま
ま^まの^まま^まに^ま海^まま^まと^まお^まと^まお^まが^まえ^まあ^まれ^ま海^まま^まと^まい^まふ^ま

は年月日ひけるなりほど猫の狎めて沙簾めをたうすに
 湯かきりやうくしるごとくつづけてねまど露の返さずも
 ちあづぶきやりくとして引きてあるゆゑなくけふはぐく
 までとよむべからぬとせぬおのきを^{あけ}あけゆげばこころ
一本 中納言
 なうぶきあるとして柏木のそとんのぞ

五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

時ぞれのそふうは君の消えあへるまありけりともてふやむく
 かの木のゆりもひてもいづれあやまちをうつるよりちして
 つぐとわづめがちなり女三のまの口今人の足付しやに初まう

[illegible]

